

絵入狂言本挿絵試考

——近松作元禄十二年まで——

鎌倉恵子

はじめに

一、「仏母摩耶山開帳」

a 描かれる役者と描かれない役者

b 半左衛門と藤十郎

c 若衆方

d 小勘太郎次

二、元禄八年度早雲座上演の作品

a 藤十郎と甚兵衛

b 若衆方と若女方

三、「姫蔵大黒柱」

四、元禄十年～十一年万太夫座上演の作品

a 藤十郎と甚兵衛

b その他の役者

五、「けいせい仏の原」と「つるがの津三階蔵」

a 藤十郎

b 武左衛門と林左衛門

六、「あみだが池新寺町」

a 藤十郎とその他の役者

b 道外方

七、「福寿海」

a 藤十郎と四郎五郎

b 団九郎

c 道外方

おわりに

図版

## はじめに

近年、絵画を使った近世演劇の研究が盛んになりつつある。絵入狂言本の挿絵については、狂言本の文章や台帳及び評判記との比較検討がなされることが多い。そして、狂言本の挿絵は、からくり等の演出を想像する手がかりとはなっても、舞台の再現ではなく、所詮、散文の挿絵として片付けられがちである。しかしそのような見方しかできないものなのであるか。絵師を含む狂言本の作者達が、舞台芸能から生じる狂言本を通して読み手にアピールしたいものは、からくりの他にはないのだろうか。舞台に関する何かをもっと伝えようとしているのではあるまいか。このような疑問から以下の試考は始まったのである。

一口に絵入狂言本といっても、周知のようにその形態は時代と共に変化している。絵師と本文執筆者の関係も不明である。また同一時代のものでも、女方を多く描いている挿絵もあれば、若衆方を多く描いているものもある。役者の位付けと描かれる回数との相関関係にも絶対的なものはない。これは狂言によって個々の役者の活躍場面、登場する回数が異なっているから、狂言の内容に挿絵が従っていれば当然のことと言えよう。さらに本文から見せ場と読み取れる場面が、必ずしも描かれるとは限らず、挿絵を描く態度は本毎に異なっている。趣向を重んじる当時であるから、一作ごとに描き方を変える工夫もしたのであろう。このような狂言本を検討するに当って、今回は狂言作者が近松門左衛門と認められる狂言本について、元禄十二年までのものを取り上げる。そして本文と挿絵が相違している場合、どちらが真の舞台を伝えているかという詮索をするのではなく、挿絵によって何が伝わるか、挿絵からどのようなことが読み取れるかを考えたい。

今回、対象とした狂言本は次の通りである。

## 内題（または外題）

上演

座

座本

版元

仏母摩耶山開帳

元禄六年 春

万太夫座

山下半左衛門

八文字屋

今源氏六十帖

元禄八年 一月

早雲座

山村伝十郎

八文字屋

けいせい阿波のなると

元禄八年 二の替

早雲座

山村伝十郎

八文字屋

水木辰之助餞振舞

元禄八年 暇乞狂言

早雲座

山村伝十郎

八文字屋

姫蔵大黒柱

元禄八年 十一月

万太夫座

坂田藤十郎

山本九兵衛

大名なぐさみ曾我

元禄十年 七月

万太夫座

坂田藤十郎

八文字屋

百夜小町・夕ぎり七ねんき

元禄十年 盆興行の次

万太夫座

坂田藤十郎

八文字屋

一心二河白道

元禄十一年 盆?

万太夫座

坂田藤十郎

八文字屋

けいせい仏の原

元禄十二年 二の替

万太夫座

坂田藤十郎

山本九兵衛

つるがの津三階蔵

元禄十二年 七月

万太夫座

坂田藤十郎

山本九兵衛

あみだが池新寺町

元禄十二年 十月

万太夫座

坂田藤十郎

八文字屋

福寿海

元禄十二年 十一月

万太夫座

坂田藤十郎

鶴屋喜右衛門?

なお、「上京の謡始」（元禄十一年一月 万太夫座）「けいせいゑどざくら」（元禄十一年二の替 万太夫座）にはそれぞれ上本の一部が現存しているが、他の作品には上本が少なく、比較検討が困難であること、挿絵部分に欠丁があることから、今回は対象外とした。



## 一、仏母摩耶山開帳

## a 描かれる役者と描かれない役者

この狂言本には見開き三葉、片面一葉、計七頁分の挿絵が収められている。それぞれの挿絵は、画面が見開きのものでは二つないし三つに、片面のものでは上下二つに、雲型で仕切られていて、全部で十場面が描かれている。<sup>(1)</sup>役人替名には、二十九名の役者が挙げられている。このうち挿絵に役名付きで描かれているのは二十七名である。描かれていないのは、室の神主役の光瀬左近右衛門と禿吉弥役のさき川竹の丞である。この二人の登場は本文に、前者は第二の揚屋の場で

かんぬし立出「是々 さいぜんのくじ人共に両方ながらはいれとの仰じや。」

後者も同じく揚屋の場で

ゐこくのかぶろ吉弥たびすがたでもどれば、おかねみて「こゝな子はぬけ参りしたか」「いや 私はぬけ参りでも

ござんせぬ、大夫様のぬけ参りのやうにして、お子のぐはんほどきにまやさんへ参りてこいと有てまいりました。

こふちをよびにやつて、しゆびのよいやうにして下さんせ。」<sup>(2)</sup>  
とある。

この当時、左近右衛門の位付けは評判記「役者大鑑」(元禄五年 但し八年までの評を含む)によると、立役 中である。<sup>(3)</sup>同じ中の位でも本作及び他の作品ではいくつかの場面に渡って描かれている役者は多く見られる。本作揚屋の場の挿絵には「けいせい町の者共」として役者名不明の二人が描かれており、このうちの一人を神主にする構図も可能であるが、そうしてはいない。また竹の丞は評判記に記載されていない。一方、本文には登退場が記されることもなく、現

在ではその他大勢として扱われるような役者まで、挿絵に役名付で描かれていることもある。役人替名と照合すれば役者名はすぐわかるのであるから彼等をどこかに描いておくことで、そのファンを喜ばせたとも言えるが、後の若衆の項でもふれるが、若手役者の宣伝の意味もあったのではないか、もしそうだとすると、一見、無原則に見える役者の描き方に座本の意志がかなり働いていると考えられるのである。

なお、本作で見たように、登場する役者の殆どが描かれるのが、当時の上方の狂言本では普通なので、以後の作品では右のような検討は加えないことをお断りしておく。

## b 半左衛門と藤十郎

次に注目したいのは、座本山下半左衛門（立役 上々）と坂田藤十郎（立役 上々）である。半左衛門は六田家次男大五郎、藤十郎は総領掃部に扮し、両者共に挿絵に四回ずつ描かれている。具体例を挙げてみよう。半左衛門は、一〇二頁(5)図右側中央では悪人の詮議、左上の(4)図中央では誤解から傾城高橋を踏みつけている。藤十郎は(6)図では右端で傾城異国を見送り、(7)図では三味線を弾きながら、(8)図では階段の途中から異国の様子を見ている。見られるように半左衛門は図の中央に動きのある姿態で描かれている。それに対して藤十郎は(7)(8)図ではぼ中央に描かれているものの、読者の視点は子役をからめた異国のほうにまず集まるのではないだろうか。この両者の描かれ方の違いは、芸風の相違によるものであろう。<sup>(4)</sup> 評判記に半左衛門は、「げいおもきしだしのやうにてかるくかるきやうにておもしろさるによつてやつしおもしろくぬれ事一風かはつてあぢにうつる（中略）武道のつめひらきまづはこうせきもつたいあつて身ふりのいきごみ。どうもいはれぬ所あり」（「役者大鑑」）とあるのに対し、藤十郎は「武道になつては山下より二わりおちて見え」（「役者大鑑」）「はでなる事がきらいやら」（「役者大鑑合彩」元禄五年？）とある。また藤十郎には本文によると、異国を相手にした(4)図の半左衛門のような演技もあった。しかしその場の挿絵はない。これは先に(4)図の場がある

ので似た図の重複を避けたと考えられる。特に半左衛門の方を絵にした理由として、彼の方が柄にあった演技であったこと、相手の女方千寿が実力・人気共に上昇中の若手で彼を絵にしたかったこと等が挙げられるが、評判記の記述から判断して、挿絵にするには半左衛門の方が藤十郎よりふさわしいと、絵師に判断されたためではないだろうか。

# c 若衆方

次に若衆方に注目してみよう。(1)図中央は摩耶山の稚児たもん丸に扮する外山千之助である。彼は元禄八年「役者大鑑」による位付けは若女方 中の上で「若衆がたをいたされた時分より、諸げいよほどしあげられて」と記されている。(1)図に当たる部分は本作口明けの

ちごたもん丸れんげ丸両人は、どうしゆく共にかいちやうの高札もたせつゝ、(中略)「さんけい致され候へ」と、

## 一々ふれ給ふ

場であり、挿絵の短冊型の中に書かれた「ちごたもん丸おふだをやる」行為は、本文にはない。単に開帳の触れをするより子役に札を渡す図の方が、読者の目を引くであろう。彼がその右のれんげ丸より大きく描かれ、衣装も派手なことに共に注意しておきたい。このたもん丸は、(9)図では綴じ目のすぐ右に縛られた姿で描かれ、横に「たもん丸しばられ」と説明が付されている。この部分は第三の摩耶山開帳の場で、出家した掃部の子の首を敵が討つが、奇瑞が起って子は無事であり、敵側は舞下りた大蛇に締め殺される場面である。この場のたもん丸については本文に記載はなく、縛られた挿絵から彼が敵側と戦ったこと、しかし開帳物にふさわしい奇瑞の場を設けるには、彼の活躍を抑える必要があり、おそらく敵側に縛られる展開のあったことが推測される。

本作にはもう一人活躍する若衆方がいる。掃部弟うたの介に扮する山下才三郎である。彼はこの頃、若衆方と若女方を兼ね、「役者大鑑」(元禄五年 但し八年までの評を含む)によると若衆方としての位付けは上々である。彼は本作挿

絵には三回描かれている。彼の姿を順に挙げると、(2)図中央、即ち綴じ目のすぐ右、(3)図右から二人め、(5)図左から四人めである。(2)図(5)図には身構えて敵をにらむ様子が、(3)図には、花山染の丞扮する御台妹との恋愛模様が、さきに挙げた藤十郎より目立つ姿に描かれていて、彼のファンを喜ばせたことが想像される。

このように、本作の挿絵では若衆方が描かれる回数は、半左衛門・藤十郎、次に述べる小勘太郎次より少なく、他の若女方、敵役と同等である。しかし目立つ姿態、目立つ位置に描かれている回数は、才三郎の場合三回で半左衛門・藤十郎と同様であり、千之助も特に目立つ姿態、目立つ位置に描かれない役者が十九名いる中で、(1)図のように描かれたと言うことは、絵師が作画の際、彼をかなり意識したと見てよからう。

絵師が若衆を描き込む傾向は、これ以前の作品にも見られる。例えば「松波少将通車」(元禄四年度 京 村山平右衛門座 八文字屋刊)第一図には桜山林之介(若衆方 上々)が念者のもとから、第五図には森島平八(若衆方 中)が少将の館から、それぞれ帰る姿が描かれている。両者が帰る場面そのものには劇的要素はなく、これらは、若衆の姿を描くための図と言える。また近松の元禄八年以降の作品には、若衆方の小野川宇源次(元禄八年の位付け 上)がよく登場する。彼の姿態も形よく目立つところに描かれることが多い。

才三郎・林之介・宇源次は、人気・実力とも当時の若衆方のトップクラスで、舞台でも活躍の場が多く、それが挿絵にも反映していると考えられる。一方、千之助・平八はそれなりに人気もあったろうが、挿絵に載せることが、その役者の宣伝にもなっていたのではないだろうか。前述のように千之助は元禄八年には、女方の方がよいと評されている。本作上演当時、座本は彼を若衆として売り出すつもりであったのかもしれない。

#### d 小勘太郎次

本作中、最も多く六場面に描かれているのは、御台に仕える局役の小勘太郎次(花車方 上々)である。彼は第一の

冒頭の場で若殿と傾城のいきさつを説明する役を担っているが、女武道や所作事を演じるような活躍はない。御台や若殿の妾腹の子に付き添う姿として描かれることが多く、構図の中心になることは少ない。その例はさきの(1)図たもん丸の左後方に見られる。(4)図は大五郎(山下半左衛門)と傾城高橋(霧波千寿)の口説の場で、高橋を誤解して踏みつける大五郎を局が止める図であって、止めるという行為自体は本文にはない。しかしこの場に登場している局が止めるということはきわめて自然の成行きで、右のような演技の有無は別にして、この図により読者の局、即ち太郎次への印象は強められるであろう。また(8)図左上は局が傾城異国を請け出しに来るところで、駕籠についての記載は本文にはない。局の登場により、若殿が本国へ帰れるのであるから、同図の局は話の展開上重要である。絵師は駕籠を描くことで、その局を読者に注目させようとしたのではないだろうか。

## 二、元禄八年度早雲座上演の作品

この時期の作品には、「今源氏六十帖」「けいせい阿波のなると」「水木辰之介銭振舞」があり、座本は三作ともに出勤俳優として役人替名に名を連ねてはいない。

### a 藤十郎と甚兵衛

第一に注目したいのは、同座している坂田藤十郎(立役 上々)と大和屋甚兵衛(立役 上)がどう描かれているかである。描かれる回数は、藤十郎が「今源氏六十帖」に三回、「けいせい阿波のなると」に四回、「水木辰之介銭振舞」に二回、甚兵衛がそれぞれ五回、六回、四回で、甚兵衛の方が多い。図の中央に描かれる、あるいは動きのある姿態に描かれる等目立つように描かれた回数は、「今源氏六十帖」では藤十郎が三回、甚兵衛が四回、「けいせい阿波のなる

と」では両者とも三回、「水木辰之介餞振舞」では藤十郎は一回であるのに対し、甚兵衛が三回で、位付けの低い甚兵衛の方が多く描かれているのである。もともと「水木辰之介餞振舞」は江戸に下る辰之助の暇乞狂言で、中巻は元禄四年に本作と同様、甚兵衛と辰之介がコンビを組んだ「娘親の敵討ち」の版木を流用しており、中巻に藤十郎の登場のな<sup>(5)</sup>いことは考慮に入れなければならない。

「今源氏六十帖」「けいせい阿波のなると」の藤十郎・甚兵衛は、互によく似た境遇の役を演じ、濡れ、やつし、敵との立ち回り等を見せている。甚兵衛の描かれた挿絵が多いのは、彼の方が踊り・拍子事等を得意とし、生霊に取りつかれたり三番叟を舞ったりという、藤十郎にない見せ場を持つためである。評判記に「をどりとひやうしとほどあふてかるはづみなれは。見所おほし（中略）所作事ひやうし事上手なれはなんぼみてもみあかぬ」（「役者大鑑」）「舞事はなやかにして面白き事申がくだ也」（「口三味線返答役者舌轍」元禄十二年）と評される甚兵衛と「風俗すなほにして役者めかず。」（「役者大鑑」）「しよさ事はさしてしまはず」（「鋸末」元禄十二年）「半左衛門は花を第一としてまつさい中の役□〔者〕。藤十郎は其花をとつてすてたる役者」（「口三味線返答役者舌轍」）と評される藤十郎との相違が、挿絵からも窺われるのである。

## b 若衆方と若女方

「今源氏六十帖」で活躍する若衆方は、小野川宇源次であるが、同じ若衆方の村上竹之丞（中の上）も挿絵では二回描かれ、両図とも目立つ位置で、あるいは刀の柄に手をやって擬勢する姿、あるいは敵を斬り伏せる姿が描かれている。本作の挿絵に描かれている役者二十五名中、二回以上目立つ位置・目立つ姿態に描かれる役者は五名である。位付けのあまり高くない竹之丞がこの様に描かれたのは、「物ごしあざやかにきこへしろうとづき仕る」（「役者大鑑合彩」）ため、彼のファンを意識してのことかもしれない。

本作で一番多く描かれているのは、袖崎いろは（若女方 中の上）である。彼は住の江なるおの介（甚兵衛）御台に扮している。本作第二で嫉妬から猫の所作をする水木辰之介のような独自の見せ場はないが、敵役に命を狙われ、隠れ家で偶然なるおの介に巡り会う、家宝の翁面を取り返して来る等、話の展開上、大事な役を担っており、登場場面の多さがそのまま挿絵にも現れているのである。<sup>(6)</sup>

水木辰之介（若女方 上々）は、本作出勤若女方中の、最上位である。彼は相生いくよの介（藤十郎）と結ばれる姫松に扮し、挿絵には三回描かれる。その中一葉は当り芸となった猫の所作が描かれている。彼はその所作の前に、龍田の神前でいくよの介に巡り会い、布団の上で盃事や、口説を展開する。人気役者二人で進められるこの場は見せ場の一つであろうが、挿絵にはなっていない。

挿絵にはその直前の、いくよの介が小姓・腰元・神主の前で、姫松の腰元はやぎきと戯れ、姫松が腹を立てている場が描かれている（11図）。この図でまず読者の目を引くのは中央の藤十郎と彼に手を取られている芳沢小せん扮するはやぎきであろう。左下、布団から半身を起こしている辰之介が小せんより目立たないのは、版が薄いためばかりではあるまい。同図藤十郎の右は藤野和兵衛（親形 上）扮する神主である。彼と藤十郎・辰之助を除いた小姓・腰元に扮しているのは、芳沢小せんを始めとする年若な役者達で、元禄五年〜八年の評判記では位付けは中、または評判記に記載されていない役者達である。彼らのうち後に大成したのは同図右下の小姓かずへに扮した早川初瀬（当時若衆方 中）のみである。挿絵は海の物とも山の物ともつかぬ役者も、上々の役者も同等に描いているのである。

10図は、なるおの介（甚兵衛）が黒尉の面をつけて敵に近づく場を描いたものである。左の二人の腰元に扮した役者達は、若女方 中の役者と、評判記に記載されていない役者であるが、両者共に辰之介と同様、狂言本全体では三回描かれている。この腰元達は本文で見る限り格別の活躍場面はなく、この場の登場については記載もない。彼らが実際にこの図のように囃子を受け持ったか否かは別として、11図と共に挿絵は、上位の役者の見せ場を強調するよりも、多く

の役者を描き込もうとする姿勢の強いことを物語っているのである。そしてこの傾向は本作以外の狂言本にも当てはまる例が非常に多いのであって、一で述べたように役者の宣伝効果をも考慮しているとみてよからう。

「けいせい阿波のなると」で注目したい若女方は、おつまに扮する水木染之介である。彼は当時位付けは中だが、描かれる回数は辰之介・甚兵衛について多く五場面に描かれている。その一例が12図で、これは養い親にだまされ傾城奉公に出されるところを、辰之介扮する元遊女のこよしに救われる場である。中央、屋根から引きずり下ろされるのがおつまを逃がした直後のこよしで、左下がおつまである。見られる通り波線で場面が仕切られたことにより、彼は単独で描かれたことになる。<sup>7)</sup> おつまを逃がしたことでこよしは再び遊女にされ、次の廓場へと舞台は展開するが、おつまが強く印象づけられるように描かれた理由はそれだけではあるまい。「役者大鑑」によると元禄八年に初舞台を踏んだ染之介は、同書で「けいの仕入はおやかた水木どのゝ手から次第」、また「役者口三味線」(元禄十二年)に「けいせいあはのなるとに坂田殿のむすめと成て、(中略)女方の玉子(中略)名人の水木辰殿のしりについて百卅里をこへ給ひ、何もかも見ならひきゝならひし給ふゆへに、かくあるとは見へた」と評されている。そして本作は辰之介が弟子染之介をバックアップすることを暗示した内容をも持つのである。染之介はさきの「今源氏六十帖」にも一回描かれている。本文によると彼は敵が減びた後の第三で、恋人を慕って狂乱する姫に扮している。この狂乱は狂言の本筋とは関係なく、染之介の見せ場を作るための場であり、それが挿絵の最後の部分に描かれているのである。この例と「けいせい阿波のなると」の例から、挿絵は座本または辰之介の意志を汲んで染之介売り出しに一役買っていると言えよう。

「水木辰之介錢振舞」第二は前述のように「娘親の敵討ち」の板木を利用したものである。第一には、これも江戸へ下る若林四郎右衛門(立役 中)の活躍する場が設けられ、彼は二回描かれている。内題にその名を織り込まれた辰之介は第二に六回描かれている。そして敵が減ばされ、藤十郎というのは扮する許嫁同士が結ばれる第三の挿絵はない。この時代の狂言本は、第三に設定されることの多い敵を減ばす場面の挿絵も含めて見開き三葉、片面一葉、計七頁にな



るのが普通で、「娘親の敵討ち」も下の敵討ちの場が描かれている。「水木辰之介銭振舞」にはそれにあたるものがなく、挿絵の数は見開き二葉、下半分の見開き一葉となっている。これは第三部分の出来が遅くて絵が間に合わなかったためであろうか。しかし当時の狂言の結末は、敵が減びお家安泰となるのが普通であるので、第三まで上演されなくても、挿絵の作成は可能なはずである。ただしそうすると辰之介を描いた図の後に、敵役及び武道事で活躍する若衆方・立役を描くことになる。本作は、辰之介の印象を読者により強く植え付けるために、辰之介の後に他の役者を描いた挿絵を置かないようにしたのではないだろうか。大団円に当たる部分の挿絵がない理由をこのように考えてみた。

### 三、「姫蔵大黒柱」

藤十郎が初座本となった顔見せ狂言である。そのためか、あるいは甚兵衛が同座していないためか、彼は出勤役者中一番多く五回描かれている。ただし本文による限り彼は所作事や立ち回り等はしていない。

この作品の挿絵で注目したいのは、鞍負之丞に扮する片岡仁左衛門（「役者大鑑」敵役 上々）である。仁左衛門は方策には敵役と記され、役人替名には立役と記されている。そして挿絵には四回描かれている。これは袖嶋源次、小野川宇源次と共に藤十郎に次ぐ多さである。彼の役は、藤十郎扮するはま松子の日之介に敵対する監物に一味して、子の日之介を手ごめにするが、説得されて改心するというものであって、その間、恋の取り持ちを子の日之介に頼んだり、恋の怨みから子の日之介を討とうとして、止める母を刺し殺したりもする。

挿絵では仁左衛門を役人替名通り立役として扱っている。即ち通常、敵役は目を大きく鋭く描いて表現するが、仁左衛門の目は藤十郎よりはやや大きいものの、監物に扮する庭瀬与一左衛門（評判記に記載なし）よりは小さい。その監物を本文では、小野川宇源次扮するちからの介が、鞍負之丞の改心以前に討つが、挿絵では鞍負之丞が監物を踏みつけ

ている。また敵役としてのイメージを強く印象づける母殺しの場合は描かれていない。舞台の実際がどうであったかは不明であるが、挿絵は仁左衛門を立役として描いているのである。

次に(13)図を見ておこう。左端が仁左衛門であるが、この図は単に彼の登場を表しているだけで、ここに彼を始めとする役者達の見せ場や狂言展開上の重要なポイントはない。同図中央後ろに立つ近松勘之介扮する小姓八弥は本文には記載されていない。しかし中央にきせるを持って座る子の日之介(藤十郎)よりむしろ目立つ。また右端後ろの小勘太郎次扮する鞆負之丞母は、本文では鞆負之丞(仁左衛門)登場前に退場している。母が殺される場は挿絵にないので、ここにしか太郎次を描き込めなかったのかもしれない。藤十郎のすぐ後ろに立つ役者については何の説明もない。しかし小勘太郎次の前に立つ腰元に比べ衣装も丁寧に描かれているので、腰元より活躍する役者即ち玉川半太夫(元禄十年若女方 上)扮する子の日之介の妾で鞆負之丞娘でもあるおゆきと判断される。役名がないのはおそらく書き落としたと思われる。このように同図は登場する役者の紹介のためのものと言えよう。

話が展開してゆくのは、この直後の場、(14)図に当たる部分でここでは、中央に立つ鞆負之丞が右の子の日之介に恋の取り持ちを頼んでいるのである。

右のように本作では、新しく座本になった藤十郎を多く描くと共に、仁左衛門の新しい役柄をも表現しようとしているのである。また、より多くの役者を描き出そうとする姿勢は他の狂言本と同様である。

なお、甚兵衛のいない座で引き続き座本を勤めた藤十郎がこれ以後の作品で、どの程度挿絵に描かれていたかは興味のある問題であるが、元禄八年度〜九年度の狂言本が少なく未調査であることを付け加えておく。

## 四、元禄十年～十一年万太夫座上演の作品

## a 藤十郎と甚兵衛

この時期も藤十郎は座本であり、再び甚兵衛が同座している。この二人は挿絵にどのように描かれているのであろうか。

「大名なぐさみ曾我」では、藤十郎は挟み箱持ち藤介と鬼王に、甚兵衛は大名と団三郎に扮している。描かれる回数はこちらも五回であるが、甚兵衛はその中一回、藤十郎にはない六方を振る姿が描かれている。それは15図で、見られるように前列中央綴じ目の左に描かれた甚兵衛は、同列左端に描かれた藤十郎より目立つ。その他の部分では16図の中央、17図の左に両者はよく似た様相に描かれている。

「百夜小町」では藤十郎は深草少将に、甚兵衛は行平に扮し、前者は一回、後者は二回描かれている。役柄はやはり似ているが甚兵衛には、赤人の姿になって敵とにらみ合う場面があり、その部分は挿絵に描かれている。このような場面は藤十郎にはなく、その分だけ甚兵衛は描かれる回数が多いのである。

「百夜小町」の切狂言「夕ぎり七ねんき」は勿論、伊左衛門に扮する藤十郎のための作品である。この切狂言の挿絵は見開きに四場面が収められていて、藤十郎はその全ての場面に描かれている。一方、甚兵衛は伊左衛門馴染みの幫間久古に扮し、常に伊左衛門に付き添って描かれているため、やはり四回描かれている。本文によると伊左衛門が久古と離れ、編笠姿で揚屋に忍んで来る場もあるが、それは挿絵にはない。これは偶然なのであろうか、それとも絵師は甚兵衛を藤十郎と共に描かなければならぬ必要性を感じたのであろうか。もし後者であるならば甚兵衛の存在は非常に大きかったと言わねばならない。

「一心二河白道」では藤十郎はさいき家の家老さゝめ大夫に扮し六回描かれ、甚兵衛は清玄に扮し七回描かれている。ここでの藤十郎は、傾城と恋仲の若殿という一般的な彼のイメージとは異なり、悪家老の妹である妻と縁を切って桜姫を守る、律儀な家老に扮している。挿絵にはお家騒動を企む相家老と太刀に手を掛けにらみ合ったり、清玄の怨霊に切りかかりたりする様子が描かれている。藤十郎は武道事が不得手といわれるが、「今源氏六十帖」、「水木辰之介餞振舞」には後室の弟や継母を斬る図がある。しかしどちらも彼の得意とする若殿やそれに類する役に扮して、濡れややつしを見せたあとでの事件解決の場を描いたものである。「一心二河白道」の藤十郎が「一心二河白常（ハヤ）」に、主人へ異見の一通、正真の事実と申べし」（役者一挺鼓「元禄十五年？」）と評される役を演じたのは、この作が顔見せや二の替ではないためかも知れない。顔見せ・二の替以外の狂言については管見に入った狂言本が少なく、藤十郎の役柄もつかめないが、このような時期の出し物で彼は新しい可能性を探っていたのかも知れない。

一方甚兵衛は清玄に扮し、第一では桜姫に恋慕し、下半身が蛇体に変化したりするが、姫を思い切った後は、姫やさゝめ大夫の妻子を守って活躍する。挿絵には七回描かれるが、前半の姫に執心する部分、即ち桜姫の帯をといたり、怨霊になって現れる部分の挿絵三葉の方が、後半部分のそれより彼は目立つように描かれている。

## b その他の役者

「大名なぐさみ曾我」では朝比奈役の藤川武左衛門（敵役 上）、荒井の藤太役の萩野折右衛門（敵役 中 但し「役者口三味線」による）が、その役柄のために目鼻が大きく描かれ、図の中央に描かれることが多い。

敵役は目がきつく体格は他の役柄の役者より大きめに描かれ、それだけでも目立つ。これは絵巻や古浄瑠璃の挿絵に既に見られる手法で、他の狂言本でも同様であるが、話の展開上、重要な敵役を絵ですぐに見つけ、粗筋を目で追って行くのに好都合であることは言うまでもない。そしてこのことは藤十郎や甚兵衛より当然目立つことであり、当時の読

者には敵役に対する印象が強かったであろうことを想像させる。

この作でもう一人目立つのは、五郎の遺児むね若に扮する金子吉左衛門である。彼は「小がらにはあれど」(「役者色茶湯」享保二年)と評されているが、図18左のように挿絵では大きく描かれ、別の部分でも敵役と同様の体格をしている。幼子に扮した道外の滑稽な印象が、彼を大きく描かせたのかも知れない。

「百夜小町」では鬼風に扮する三笠城右衛門(敵役 上 但し「役者口三味線」による)と式部の丞に扮する玉川七左衛門(立役 中 但し「役者千石籠」元禄十二年による)の太木を引き合う場が注目される。本文には「(式部の丞)太木をひつさげ打付る。おに風しつかと取。(式部の丞)づきんぬげば角まへがみ也」とあり画中の説明には「しきぶのぜう太木引あふ」とある。引き合う芸は、江戸の荒事に見られるが、上方の狂言との影響関係は興味深い。<sup>(8)</sup>なお城右衛門は敵役にしては珍しく「今少<sup>(9)</sup>せいたかくしてしんぜたし」(「役者略請状」元禄十四年)と評されているが、挿絵には大柄で背も高く描かれている。ここにも前述のような敵役を大きく描く習慣が見られるのである。

また同図には「小性<sup>(10)</sup>こ七郎切はらふ」図も描かれている。本文に小七郎(桜山おの三郎 評判記に記載無し)が活躍する描写はなく、これも挿絵が若衆の活躍を表現している例となる。

「一心二河白道」では二人の若女方、桜姫に扮する霧波千寿(上々)とささめ大夫女房お竹に扮する水木辰之助(上々吉)を中心に見てゆきたい。

千寿には冒頭で若衆方大和川甚之介(上)に濡れかける場はあるものの、その他に彼独自の芸を見せる設定は挿絵からも本文からも窺えない。しかし桜姫が清玄や敵役に追われるのにつれて舞台が展開するため、彼の出番は多く、挿絵にも七回描かれている。

辰之助は、兄が敵側故に夫に去られ、百姓家で下女奉公している境遇で登場する。本文によるとその家に思いがけず桜姫の供をする夫がやって来て、姫の口添えて仲が直りかける場がある。しかし挿絵にはその直後の、百姓家の主が暗

闇の紙帳の中でお竹とささめ大夫を取り違えて濡れかかるところへ、主の女房が灯をもって来る滑稽味のある場が描かれている。再会した夫婦が子供達の寝姿を見ながら語り合う落ち着いた場より、人物の出入りの多い動きのある場を挿絵にしたのである。またこの取り違えから主の悪巧みが知れ、ささめ大夫と桜姫は再び二人で落ちのびることになるので、絵師は次の場へつながる大事な場としてここを選んだことも考えられる。この後、子供達と百姓家に残ったお竹は、兄を始めとする追っ手と戦い手負いとなるが、子供達の活躍で兄の首を挙げる。挿絵は手負いとなったお竹と、伯父を殺す姉及び、母子を助ける下人徳蔵（金子吉左衛門 道外方 上々吉）が釜の下に隠れる様子を描いている。次の図には徳蔵が手負いのお竹を乗せた車を引き、姉は小歌を歌い、弟は槍踊りをして物乞いするさまが描かれている。

本文ではこの後、敵に囲まれたお竹が徳蔵に車を操らせ自らは、「両手にて（敵の）二人がわきざしぬき取、さま／＼はたらき、なんなく二人を打」場があるが、挿絵にはない。この場が演じられたなら「舞の手ひやうし事其外身をこなしておもいれをうつすに妙あり」（「役者大鑑」）と評されている辰之助が、足を使わずに働く趣向として見せ場になったことであろう。しかし絵師はこの立ち回りより子ども達の「さもいたいけにみへ」る姿を描いている。先の子供達の伯父殺しの挿絵もそうであるが、読者・観客は子役の活躍を喜んでいたようである。

さて、お竹が「なんなく二人を打」つと夫が登場、兄の首を差し出すことでお竹は晴れてささめ大夫の妻に戻る。この場の挿絵は19図で本文の「おゝ 今こそほんのめうとじやと、いだし付悦ぶ、所へさくら姫みきの丞皆々来り、なふ兄弟の子を、敵の侍が取て行しと云所へ、せいげん子共をばいかへしつれ来れば、人々悦び」と照合する部分である。見られる通り前列中央に大夫、お竹、首を見せる徳蔵が描かれているが、その他の人物、さらに左上にはお竹が斬った敵まで描き込まれている。このように多くの人物が描かれているため、右の場の中心となるべきささめ大夫夫婦が目立たない。この挿絵は一つの事件をクローズアップせず、なるべく多くの人物を描こうとしているのである。また当時の舞台は長々と夫婦再会の場を演じていないで、続いて「皆々来り」次々と舞台が展開していたのかも知れない。人物が

多く描き込まれている絵は、賑やかな当時の舞台の雰囲気伝えていている可能性もある。

なお本文はこの後の第三で桜姫が地獄へ赴き蘇る記述があるが、その部分の挿絵はない。挿絵は敵の張本人を若衆方二人（小野川宇源次 大和川甚之介）が討つ大団円を描いている。本作の絵師は限られた枚数の中で、狂言の結末を重視してその場を描いたのである。

## 五、「けいせい仏の原」と「つるがの津三階蔵」

### a 藤十郎

「けいせい仏の原」で藤十郎の描かれた回数は十回とこれまで見てきた中では一番多く、一座中でも彼が最も多く描かれている。そして本文からも、彼の見せ場が多いことが読み取れるのである。この時期、藤十郎の位付けは上々吉であるが、上々の甚兵衛は同座しておらず、位付けの面で藤十郎に次ぐ者は、上の柴崎林左衛門である。甚兵衛は前述のように、藤十郎と似た役柄を演じているが、所作事、拍子事を得意とし、その部分が描かれると藤十郎より挿絵に描かれる回数が多くなっている。しかし林左衛門は甚兵衛と芸質は異なり武道事・実事以外は好評とは言えない。そのため本作では、藤十郎がこれまで甚兵衛が受け持っていたような、動きの多い演技も受持つこととなったのである。<sup>(10)</sup>これについて「役者口三味線」には「此人近年になき、情の出しやう。所作の外に、手水鉢に身をへんげ、あるはふより、やねにつたひて天上し。又はこたつの姿とあらはれ。心身共にもまるゝゆへ。一チばいでけたやうにみゆる事。此人のはたらきにあり」とある。この評中、挿絵になっている場面は、「手水鉢に身をへんげ」「やねにつたひて天上し」である。その他に彼が描かれているのは、鷹狩の帰りに訴訟を聞く、阿呆払いになる、竹姫の怨霊を恐れる、虚無僧姿で廊へ来る、遊女の争いを見ている、馴染みの遊女を縁切りする、親の敵を討とうとする、敵を棟打ちする等の場で、舞・

踊り・拍子事を彼が演じている図はない。演じなかったか、演じたとしても甚兵衛ほどの出来ではなかったのである。藤十郎は長台詞が得意であり、本作第一に設定されている大名下屋敷で奥州とその腰元に身の上を語る場は有名である。しかし動きの少ないこの場は挿絵になっていない。それゆえ本作挿絵に藤十郎は多く描かれていても、彼の得意芸を描ききってはいないと言えよう。

「つるがの津三階蔵」は「けいせい仏の原」後日談の一つである。ここでも文蔵に扮した藤十郎は挿絵に一番多く描かれている。「耳塵集」には本作の上に設定された奥州の座敷の場で、忍び込んだ文蔵の長台詞が観客に飽きられ、面白がられるように苦心したことが記されている。しかし「けいせい仏の原」同様、長台詞の場面は描かれず、その場については毛氈が蛇となるからくりと、竹姫の亡霊出現、文蔵が気を失う、奥州の兄で敵役の忠太左衛門（藤川武左衛門）を奥州がたばかる、家老八郎右衛門（柴崎林左衛門）が長持ちから半身を出し、敵とにらみ合う部分等が描かれている。ここでも挿絵は見た目に面白い動きのある場面を描こうとしているのである。

## b 武左衛門と林左衛門

「けいせい仏の原」挿絵で目立つ役者は、藤川武左衛門（敵役 上）と柴崎林左衛門（立役 上）である。前者の扮する介太夫は、長々の浪人の末、知らずに娘の愛人文蔵の敵に仕官する。この介太夫によって文蔵が阿呆扱いとなる直接のきっかけが作られ、文蔵が愛人と別れる決心をし愁嘆場が構成される。武左衛門自身体格はよかったが、大柄に描かれるのは敵役であるためであろう。そしてこの描き方が重要な役割を担っている武左衛門を、読者に印象付ける効果のあることも確かである。後者の扮する八郎左衛門は敵役と戦う家老である。図柄によっては体格や目が武左衛門と同等の大きさに描かれ、敵を滅ぼし大団円に導く人物であることを、知らしめている。

なお「つるがの津三階蔵」で、敵役武左衛門・三笠城右衛門及び彼等に武力で対抗する柴崎林左衛門が大きめに描か



れているのは勿論である。

# 六、「あみだが池新寺町」

## a 藤十郎とその他の役者

本作は、柴崎林左衛門、袖島源次、玉村ゑもんの暇乞狂言である。挿絵に多く描かれているのは、家老勝右衛門とその女房に扮する林左衛門、源次、及び大名平太郎（坂田藤十郎）の後添さつきに扮する岩井左源太でそれぞれ六回ずつ描かれている。五回ずつ描かれているのは、藤十郎及び勝右衛門に対する悪家老可右衛門に扮する三笠城右衛門である。妾おまきに扮するゑもんは四回描かれている。

本作の藤十郎は、庭作りとなつてのやつし、敵に追われて窓から逃れる、御台の幽霊を恐るゑさま等が描かれているが、城右衛門、武左衛門等の敵役、武道事を見せる林左衛門の方が大きめに描かれていることは、先行作と同様である。

## b 道外方

本作で注目されるのは、道外方の描き方である。<sup>(11)</sup> 本作には田島半兵衛（半道 中の上）、天井又右衛門（中の上）、金子吉左衛門（上々吉）が登場する。彼らはこれまでの作品にも登場し、それなりに活躍もしていた。しかし挿絵では顔が他の役者より大きく描かれることはあつても、図の隅に演技らしいこともせず立ったり座ったりしている姿が多く、敵役や武道事を得意とする役者に比べて、目立つ構図は少ない。<sup>(12)</sup> ところが本作では、あんなく坊に扮する田島半兵衛は、勝右衛門側の動向を盗み見たり、幼い若殿を背負つて逃げたりする様子が、図によっては中央に描かれているの

である。天井又右衛門は平太郎（藤十郎）の舅藏人役である。彼は平太郎が実名を名乗る場面と、平太郎、さつきと共に敵に追われ逃げる場面に描かれている。平太郎の名乗りを聞く彼は、藤十郎より大柄で図の中央に座しており、逃げの姿は、裸でとつくりを提げている。このためどちらの図でも藤十郎よりむしろ目立つのである。又右衛門は「三十丈の天井へも首のつかへる様なせい也」（『野良立役舞台大鏡』貞享四年）と評されているが、これまでの挿絵には、特に大きく描かれてはいない。本作での又右衛門の演技・活躍ぶりには大きく描きたくなる要素があったのかもしれない。金子吉左衛門は、阿弥陀が池住持に扮し、本作挿絵の最後の部分の左端に立っている。半兵衛、又右衛門の図に比べると、動きのない姿であるが、敵役城右衛門と同等の体格に描かれている。本文には彼の役について「あみだかいけに堂を立、ぢうじ出給ふ所へ、子おろしのばゞ参り、悪心をさんげする」と言う記述しかないが、ばゞも挿絵左、吉左衛門の下に描かれている。読者は大きめに描かれている吉左衛門と本文から、彼のこの場の活躍を想像したであらうし、実際の舞台を見たものは、改めて彼の演技を思い出したであらう。

このように本作挿絵は、道外方の活躍をそれまでのものより強く意識して描いたと考えられるのである。

## 七、「福寿海」

### a 藤十郎と四郎五郎

本作は元禄十二年十一月、即ち十三年度の顔見世狂言である。この年も藤十郎は座本を勤め、甚兵衛は同座していないが、藤十郎は挿絵には二回しか描かれていない<sup>(13)</sup>。立役で最も多く描かれているのは、栄花之介に扮する中村四郎五郎で四回描かれている。四郎五郎はこの年度に大坂から迎えられた役者で、狂言は彼の見せ場が多くなるように仕組まれ、挿絵もそれを反映しているのである。彼は十二年三月刊行の「役者口三味線」では、立役 中の上に位置し、「舞

拍子やつしぬれごとならず、(中略) つよいあらむしやにしてようござんす」と記されている。本作については「役者談合衛」(元禄十三年)に「さる屋敷がたの門口へより、傘が一本かりたいことゝ、ふつと内へ入といなや、こしもと共、かぶきのまねとて、実役敵役様々の芸づくし、此人を狂言の相手と思ひ、しよさをするとは思はず、ふしぎさうなかほぶり、おかしく、千手せんじゆとのぬれも、いつそかたうてよくあたり、扱あつかる物のすそをとり、みかさとのつめひらき、つようして口上におとしがよく、後にまごのやつしまだ出来たるはしあひ、見物よこ手をうち、扱あつかも功者」と顔見せでの成功が記されている。挿絵には、この評に記された部分の中、濡れ以外の場面と、評にはない敵を切り伏せる場面が描かれていて、体格も敵役に匹敵している。また本文では敵をあるいは生け捕り、あるいは斬り殺すのは、若林四郎右衛門(立役 中の上)扮する家老波之進及び村上竹之丞(若衆方 上々)扮するかつらの丞と読み取れる。しかし挿絵にはこの場面に四郎右衛門と竹之丞は描かれず、敵側の三人を踏まえて抜刀している栄花之介が描かれていて、さきの「姫蔵大黒柱」の仁左衛門の場合と同様、四郎五郎を読者に強く印象づける挿絵となっているのである。

## b 道外方

「あみだが池新寺町」では道外方の活躍を挿絵から汲み取ることが出来た。本作に登場している金子吉左衛門と田島半兵衛はどうであろうか。まず吉左衛門であるが、彼は松の尾家家老の下人久さうに扮し、当主名酒之介の許嫁はま松姫の様子を探るため、稚児に変装して登場する。挿絵には、稚児になっている彼が二回描かれている。どちらも武左衛門ほどではないが、若衆や立役よりは顔が大きく、所謂道外の顔に描かれている。但し体格・姿態は特に目立つように描かれてはいない。半兵衛は梅がへ姫の傳百介に扮しており二回描かれている。その中、片肌脱いで、栄花之介と偽栄花之介(三笠城右衛門)の争いを止める図柄は、彼の足元部分に「百介ちりやくにてむめがへ姫をつれ立のく」の説明もあって目立つと言えよう。

右のような二人の描き方の相違は、役柄の相違の反映と考えられる。ただし「あみだが池新寺町」と本作の吉左衛門の描き方の相違は、作画態度の相違にもよると捉えられよう。

### c 団九郎

本作挿絵にはもう一つ注目したい点がある。それは主謀者亀右衛門（藤川武左衛門）を生け捕ったのは、本文では a で記したように波之進とかつらの丞であるが、挿絵では宮崎団九郎（立役 中）扮する旅籠やさぢ右衛門となっていることである。さぢ右衛門は本文によると、この挿絵直前の場面で見場し、馬子にやつした栄花之介の相手をするが、他に登場はない。挿絵にはここで描かれているのみである。挿絵が実際の舞台を写したものなら、団九郎を、四郎右衛門や竹之丞をさしおいて活躍させる必要があったことになる。また挿絵が舞台と異なっている場合は、彼をどうしても描かなければならない理由があったことになる。彼は四郎五郎とは違い前年度も万太夫座に属し「けいせい仏の原」では大殿刑部に扮している。ただし家老に扮し、敵役を向こうに回して活躍する四郎右衛門に比べると、団九郎の登場場面は少ない。挿絵にはなるべく大勢の役者を描くべく、ここに団九郎を載せたのかもしれない。同じ挿絵に、やはり本文のこの部分には登場が記されていない藤田大次郎（若女方 中）が描かれている理由も同様ではないだろうか。

### おわりに

以上、近松作という共通点を持った、十三作品の挿絵を眺めてきた。一口に絵入狂言本といっても、細かくみれば挿絵の様相には違いがある。その中で注目すべきことをいくつか確認しておきたい。

まず第一は、藤十郎の描かれ方である。彼は今回見た狂言本の時代には、常に一座の立役の中では、最上位を占めて

いた。<sup>(14)</sup>描かれる回数も「福寿海」以外が多い。しかしいつも絵の中で非常に目立つ存在と言うわけではない。むしろ目立つのは同じ立役なら半左衛門や甚兵衛である。これはさきに挙げた評判記から窺えるように、地味な印象を与える役者であったからであろう。また「此人かしこい人にて座もとせぬ人なりしが近年とふ無分別がおこつたやら座もとせらる事ふしん」(「役者大鑑」元禄十年)とも評されるように自身、ものごとの表面に出たがらない人物でもあったらしい。座本になってからは、一座の中で彼が最も多く描かれている本もある。しかし甚兵衛が同座すると、描かれる回数、目立つ構図は、甚兵衛優位となる。これは狂言の内容や、芸質の違いによるところが多いのであろうが、藤十郎が自分より年少ではあるが、早くから座本の経験を持ち、一族に有力な役者もいて勿論、彼自身も人気役者であった甚兵衛に遠慮してのこととは考えられないだろうか。もしそうであるならこのような点にも、挿絵に座本の意志が反映していると言えるのである。

次に挙げたいのは、道外方である。元禄十年頃から、金子吉左衛門を中心に本文で道外方に関する記述が増える傾向が強くなる。そして挿絵に描かれる回数も増えて来るのである。吉左衛門が狂言作りに携わっていたことはよく知られており、「近年狂言をつくらるゝについて、自分の役めを第一にたてゝ、よい所をしてとり給ふと、世間の評判よろしからず」(「役者口三味線」)との評もある。彼を始めとする道外方の姿が狂言本に目立つ時期とこの記述は一致する。これは有力役者の本への介在という点と、道外方の活躍が増え、立役・実事との区別がつかなくなり、やがて道外自体が消えてゆくという役柄の歴史をたどる上でも、興味深い。

また絵入狂言本は、若手の役者、新しく一座に加わった役者、それまでと異なった役柄を演じる役者等の紹介・宣伝という役割も果たしていたのではないだろうか。この問題については今回はとりあげなかったが、いずれ上本も視野に入れて検討しなければなるまい。周知のように狂言本の上本は挿絵のスペースが広い。従って登場する役者もそれだけ大きく描けるのである。当たった狂言が上本として出版されたと言われている。しかし「けいせいゑど桜」のように「は

やらざる」(役者口三味線) 狂言の上本も出版されている。上本を出版する、あるいは出版の予告をすることで座中の意気込みを世間に知らせ、一方でそれに役者を大きく描き、その座の宣伝をしたのではないだろうか。座本を含めた舞台関係者は、出版物による宣伝効果をよく認識していたと思われるのである。

絵入狂言本には、見てきたように様々な役者が様々な理由で描き込まれている。近松の元禄十三年以降の作品、違作者の作品、大坂や江戸のもの、数少ない上本等、今回扱わなかった作品には、又別の傾向が見られるかもしれない。いろいろな読み方の可能性をさらに探って、製作者、役者、座本、享受者がそれぞれ狂言本に何を期待していたかを考えていきたい。

## 注

- (1) 本によっては見開きが四つ以上に仕切られている場合もあるが、以後、これについては断わらない。
- (2) 以後、本文・挿絵は「近松全集」(岩波書店)第十五卷第十六卷による。
- (3) 以後、役者の位付けは原則として、上演時により近い時期に刊行された評判記の記述による。
- (4) (9)図は敵が奇瑞により滅ぼされる場で、二人の活躍は本文からも挿絵からも窺えないので比較対象外とする。
- (5) 後の四人の位は上及び上々。
- (6) ただし本文と挿絵を見る限り翁面を取り返す場はない。
- (7) 本作第一にやはり波線で仕切られ甚兵衛が継母に追いかけられる図があるが、これは二人で描かれている。
- (8) 服部幸雄氏「象引き——『引き合う』芸能史」(「さかさまの幽霊」所収)に詳しい。
- (9) 評判記によると、敵役は以下のように評されている。

片岡仁左衛門 「身ぶりのつしりと見えてはゞのあるしだし」(「役者大鑑」元禄五年)

「かつこう大きにして」(「野良関相撲」元禄六年)

松永六郎右衛門 「かつほくもよい」(「けいせいゑどざくら」芸評部分)

藤川武左衛門 「男つきでつしりとたくましく」(「鋸末」元禄十二年)

「せい少しひくけれ共大はゞにしてでつくりとし」〔役者万年曆〕元禄十三年）

なお城右衛門も「役者談合衝」〔元禄十三年〕には「かつほく敵役にうつて付たり」と記されており、あるいは武左衛門に似た体型であったかもしれない。

(10) 甚兵衛は、さきにあげた他、次のようにも評されている。

(11) 「こんくはいの軽わさは元祖（中略）一から十迄万能丸」〔菊の藩架〕元禄十二年）

本稿では半道も一緒に取り上げておく。

(12) 「大名なぐさみ會我」の金子吉左衛門の例はあるが、むしろこれは例外であろう。また揚屋亭主に扮して喧嘩の仲裁をしている程度の図はある。

(13) 挿絵に描かれる回数が多いのは、岩井左源太（若女 上々）五回、霧波千寿（若女 上々）藤川武左衛門（敵 上）中村四

郎五郎（立役 上）共に四回である。左源太・千寿が多いのは、彼らが重宝「太平御覧の書」を伝える武内家の姉妹に扮し、この姉妹の行くところにそれぞれの許婚や敵役が登場して、事件が展開するからである。

(14) 但し半左衛門の座にいた時は彼と同位。



仏母摩耶山開帳

(4)



仏母摩耶山開帳





(6)

(7)

仏母摩耶山開帳



(8)

(9)

仏母摩耶山開帳



(12)

けいせい阿波のなると



(10)

(11)

今源氏六十帖



柱黒大蔵姫



(17)



(16)

我曾さみぐ大名



(18)

大名なぐさみ曾我



(19)

一心二河白道